



応用生態工学会ニュースレター
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

No.62

2013 (平成 24) 年 12 月 13 日 (火) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: <http://www.ecesj.com/>

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 藤田乾一, 事務局長 小川鶴蔵)

1	はじめに	1
2	新会長の挨拶	2
3	第 17 回大阪大会報告	3
3.1	第 17 回総会報告	3
3.2	大阪大会報告	6
4	理事会 (幹事会) ・委員会報告	15
5	行事開催報告	20
5.1	第 5 回フィールドシンポジウム	20
5.2	第 12 回北信越現地ワークショップ in 福井	24
6	2013 年度行事結果と今後の予定	28
7	事務局より	29

1 はじめに

今年も残るところあと僅かとなってまいりました。ニュースレターもこれが今年最後の号となります。今回のニュースレターは、9 月 18 日から 21 日にかけて開催した第 17 回大阪大会の報告を中心に、8 月から 11 月にかけて開催した各地域でのワークショップなどの報告とともにお伝えいたします。

また、第 17 回総会では、大会期間中の最終日、9 月 21 日に開催し、第 9 期の役員が改選されました。新会長には、谷田一三大阪府立大学名誉教授が選出されました

さて、例年より少し早めですが、2014 年度期の会費の納入ご案内を 11 月に発送、発信しました。2014 年度の学会運営は、2013 年度内に納入された 2014 年度会費をもって運営する仕組みです。どうか、本年度内に納入をお願いします。

2 第9期会長、谷田一三大阪府立大学名誉教授挨拶

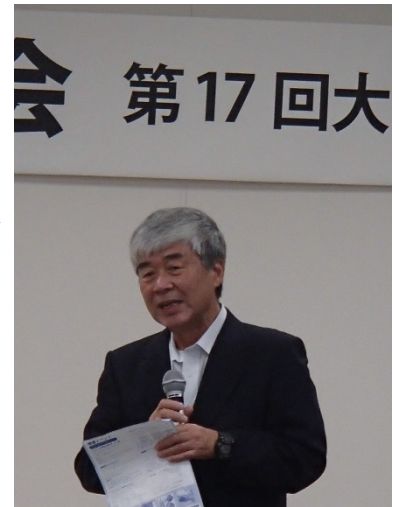
1997 年の夏、学会発足の直前、発起人への参画のお願い、発足後の人事の調整などに奮闘していた熊野可文氏とともに走りまわっていたのが、昨日のように思い起こされます。 発足とともに初代の幹事長を拝命しましたが、このような実務に疎い私を、会長、副会長、理事、それに事務局に支えられ、なんとか幹事長時代を過ごしました。

今も変わらない本学会の理念である、工学と生態学の学際領域に新たな学を創設するという目標は、かなりの成果をあげてきたと思います。工学プロパーと生態学プロパーが、ややぎこちなく会話を重ねていた発足時の第一世代、応用生態工学を基盤に研究を始めて今も続けている第二世代、この学を中心とする研究室や講座で育ってきた第三世代、この短い時間に多くの世代が知を継承しながら育ってきたことは、大きな喜びです。

幹事長時代に大きな印象を受けたのは、行政、民間会社、アカデミズム（大学、研究機関）の三位一体での学会運営や研究活動でした。学会誌の収載論文や大会講演を見ても、この三位一体の体制を実質化した研究が多くなったことに気付かれた方も多いと思います。さらに、近年は、大学院生、ときには学生の、研究への参画や発表が増えています。土木工学、生態学の関連学会のなかでも、若者の元気な学会であると思います。三位一体から四位一体へ、この傾向をさらに促進したいと思っています。

近藤会長が苦勞して変革された事務局体制、発足当初から事務局あるいはその事務局長の人材と経費を、特定の民間の会社をお願いしていました。この解消は、長年の課題でしたが、やっと新体制が始まりました。この体制の定着は、必ずしも容易ではありませんが、単年度の収支バランスの確保とともに、なんとしても任期中に定着する方向を見つけないと思っています。

2013 年度には、現在の中期計画が終了します。その評価とともに、次期中期計画の策定も必要になります。学会のさらなる発展につながる計画については、若手が中心の幹事会が、着実にありながらも先進的なアイデアを出してくれると期待しています。ただし、終了する研究の評価、次期計画の評価には、理事会だけでなく、過去の会長や副会長、あるいは理事経験者の皆さまの知が必要になると思います。そのような方々の知も継承していきたいと思っています。



3 第 17 回大阪大会報告

3. 1 第 17 回総会報告

第 17 回総会は、平成 25 年 9 月 21 日（土）10 時 30 分～11 時 30 分に大阪府立大学 I-site なんばで開催されました。

総会議長には、水計画研究所の 古川整治氏 が選出され、議事進行に当たられました。

総会の議事は 2012 年度事業報告があった後、以下の事項が審議されました。

3. 1. 1 第 1 号議案 2012 年度決算報告が行われ、承認されました。

2012 年度の収支差額は、－4,286,011 円の赤字となり、その内容が報告されました。

- ① 予算対比収支では、収入の部では、会費収入が予算に比べて 3,061,518 円の減収となったことが大きい。この理由には、期末までに入金された会費自動引き落としの事務処理が遅延し、2012 年度内に経理する予定の個人会員会費 1,847,800 円の入金処理が翌期処理になったこと、個人会員会費の減少 713,718 円、賛助会員会費の減少 500,000 円による分が生じたことによる。
- ② 雑収入＋事業収入は、予算に対し 1,281,423 円の減額となったが、当初予算で 2,000,000 円計上していた研究発表会収支を三学会合同経理として扱うことに変更したため、2012 年度経理から除外し、このため減額表現となったものである。三学会大会の収支は 2012 年度経理にはまだ反映しておらず、精算事務が終了後、次期において反映させることが報告された。
- ③ 助成金収入では、河川整備基金収入 1,200,000 円を予算設定していたが収入支出とも 0 円（収支に無関係）となった。この理由は、ELR2010 東京の共同開催が実現したことにより、当初予定していた主催シンポジウムが無くなり、河川整備基金を申請する必要がなくなったことによるものである。
- ④ 支出の部では、予算に対して 2,947,638 円の減額となった。このうち管理費は 802,310 円の減額となり、また幹事会委員会等の旅費に関する科目に関する減額は、節減が反映したものである。支出の増額要素は、会誌編集費が 2 割増額したが、ページ数が増加した事によるもの。

また、特別会計の中期計画実行費は、1,300,000 円の予算に対して、2,003,258 円を執行し、733,258 円の増額であった。しかし、特別会計経理としては、昨年の実行予算残 849,202 円を見込んでいたので、特別会計としては、145,044 円の減額と見ることが出来る。

3. 1. 2 第 2 号議案 2014 年度事業計画案、第 3 号議案 2014 年度予算案が審議され原案通り可決されました。議案の内容は以下の通り。

まず、2014 年度の予算作成方針は、引き続き収支を一致させる均衡予算とすることとし、以下の内容が提案されました。

予算作成方針に基づく均衡予算とするために、また、収入について依然厳しい状況が続くと見込まれることから、全般的には過去の実績に比べて縮小予算を設定せざるをえず、主要な活動について一定の「節減額」を組み込まざるを得なかったこと。

今後においては、予算管理にいつそうの注意をはらうと共に、さらなる経費の見直しを行う一方、新規会員の獲得を図り、円滑な学会活動を図ること。

昨年度（2013）で中期計画が終了したので、また、次の中期計画については今次の中期計画実行状況の評価を行ってからの策定となるので、その実行費等を 2014 年度予算には計上しないこと。

- ① 収入では、会費収入は現在の登録会員数をそのまま計上。すなわち、賛助会員を含む会員増の取り組みは引き続き行っていくものの、それを見込んだ（実態になっていないものに依存した）予算案策定とはしない。また河川整備基金は 2012 年度実績額を計上。
- ② 支出では、管理費は、事務局体制の変化増額分を計上した（2012 年度決算を基本に、事務局給与増加分 500,000 円（－700,000 円＋1,200,000 円）を加算、2012 年度アルバイト給与実績を同額見込む）、節約 47,135 円を見込んだ。
 - ・会誌編集費は、2013 年度当初予算 2,500,000 円からは 30 万円上積みとなっているが、実績額に対しては 200,000 円の減額となっている。
 - ・会議費はさらなる節減（100,000 円）を図る。
 - ・委員会活動費は、まず、テキスト刊行委員会費について出版に必要な経費を想定して必要最少額を計上し、また普及・連携委員会経費は 2012 年度実績を参考に節減額（100,000 円）を見込んだ。
 - ・地域講座費用は、2013 年度予算より 20 万円節減の 2,300,000 円で設定した。
 - ・その他の経費は、2013 年度予算額と同額を計上した。

3. 1. 3 第 4 号議案

役員改選が提案され、原案通り可決されました。新しく選出された役員を紹介します。（敬称略, 2013 年 9 月 21 日現在）

会長	谷田 一三（新任）	大阪府立大学名誉教授
副会長	中村 太士（再任）	北海道大学大学院教授
	島谷 幸宏（新任）	九州大学大学院教授
	虫明 功臣（新任）	東京大学名誉教授
理事	浅枝 隆（再任）	埼玉大学大学院教授
	河崎 和明（再任）	公益財団法人河川財団参事
	久保田 勝（再任）	東北電力顧問
	藤原 宣夫（再任）	大阪府立大学大学院教授
	成田 賢（新任）	応用地質株式会社取締役社長
	甲村 謙友（新任）	独立行政法人水資源機構理事長
	関 克己（新任）	京都大学客員教授
	角 哲也（新任）	京都大学防災研究所教授
	島崎 由美（新任）	いであ株式会社内部統制本部長

	清水 義彦 (新任)	群馬大学教授
	関島 恒夫 (新任)	新潟大学大学院准教授
	高村 典子 (新任)	国立環境研究所生物・生態系環境研究センターセンター長
	風呂田利夫 (新任)	東邦大学名誉教授
	渡辺 綱男 (新任)	一般財団法人自然環境研究センター 上級研究員
	渡邊 康玄 (新任)	北見工業大学教授
幹事長	藤田 乾一 (新任)	水資源機構関西支社 支社長
副幹事長	萱場 祐一 (再任)	土木研究所水環境研究 G 河川生態 T 上席研究員
幹事	仮谷 伏竜 (再任)	(株)建設技術研究所北海道支社環境室 主幹
	沖津 二郎 (新任)	応用地質 (株) 応用生態工学研究所 所長
	藤井 政人 (再任)	国土交通省水管理国土保全局河川環境課 河川環境保全調整官
	田代 喬 (再任)	名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻 准教授
	三宅 洋 (再任)	愛媛大学大学院理工学研究科 准教授
	東城 幸治 (新任)	信州大学理学部 生物科学科 准教授
	佐川 志朗 (新任)	兵庫県立大学自然環境科学研究所田園生態系 准教授
	横山 勝英 (新任)	首都大学東京都市環境学部・都市基盤環境コース准教授
	竹林 洋史 (新任)	京都大学防災研究所流域災害研究センター 准教授
	吉村 千洋 (新任)	東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻 准教授
	西廣 淳 (新任)	東邦大学理学部生命圏環境科学科 准教授
	中村 敏一 (新任)	(一財)水源地環境センター 技術参与
	根岸淳二郎 (新任)	北海道大学大学院地球環境科学研究院 准教授
監事	廣澤 遵 (再任)	株式会社建設技術研究所東京本社副本社長 執行役員
	西 浩司 (新任)	いであ株式会社国土環境研究所生物多様性計画部 部長

3.2 大阪大会報告

3.2.1 あいさつ（大会実行委員長 池淵周一）

応用生態工学会第17回全国大会が、平成25年9月18日から21日の4日間にわたり大阪で開催されました。開催直前に、大雨に関する特別警報第1号が発せられた台風18号が淀川水系にも来襲し、18日のエクスカーションは一部見学場所を変更するに至りましたが、その後は晴天に恵まれ、盛会裡に終えることができました。

研究発表会、公開シンポジウムはいずれも新装なった大阪府立大学I-siteなんばを会場に行われました。

参加者は、エクスカーション25名（バスのみ8名、船のみ6名、バス+船11名）研究発表会285名、公開シンポジウム210名でした。

自由集会では、「放射性物質動態と流域生態系」、「震災と環境対策」、「震災復興に応用生態工学がどのように貢献できるか」、など2011年3月の東日本大震災・津波や原発事故に関わる応用生態からの挑戦を扱ったもので、多くの関心がもたれました。公開シンポジウムでは、「都市河川の自然再生と防災を考える」をテーマに、話題提供と議論に活況を呈しました。懇親会では大阪らしい食材でおもてなしをしました。

河川財団からは公開シンポジウムにあたり助成をいただき、大阪府立大学からは会場の提供や設営に多大の便宜を図っていただきました。

最後に、大会全体を通じて盛会裡に終えることができたのも講師の皆様、大会参加者はもとより、とりわけ準備から大会終了まで精力的に活動いただいた実行委員会の皆さまの協力あってのことと深く心より感謝申し上げます。

3.2.2 はじめに（澤田直）

大会運営には、池淵周一実行委員長を中心に、総勢62名からなる実行委員会により、企画・運営されました。大会は、大阪市内の都市河川と防災施設を見学するエクスカーショんと、府立大学I-siteなんばの1つのフロアの会場をフルに使った、研究発表、自由集会、懇親会、総会、公開シンポジウムで、動線の短いコンパクトな大会への挑戦でした。以下に各部会のリーダーを中心に報告します。

3.2.3 エクスカーション（9/18）（千葉秀之）

エクスカーションでは、淀川、大川を中心とした大阪市内の都市河川の防災機能や自然環境をバスや船で半日かけて見学する行程でした。

過日の台風 18 号の影響で淀川が増水し、コースの一部を見学できなかったことは非常に残念でありましたが、「都市河川の自然再生と防災」のテーマの防災面を実感できたことや洪水直後のワンドなどを見学できたことは、参加者の印象に強く残ったのではないかと思います。

（1）バスコース（11:00～17:00）

（講師：河合典彦氏（大阪市立城陽中学校・国土交通省淀川環境委員会委員）・上原和彦氏（大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター・国土交通省淀川環境委員会委員））

淀川では、河口域の干潟やワンドなど水際まで近づいて魚類や貝類、底生生物などの生物調査や淀川大堰管理橋を渡るなど、普段、立ち入れられないような行程を予定していました。

しかし、開催3日前に発生した台風18号の影響により、淀川河川敷内は、泥のぬかるみ残り、ゴミが多く、草木も倒れており、近づくことが危険な状態であったため、堤防上からの見学に変更しました。重要文化財である毛馬第一閘門や毛馬排水機場では、国土交通省淀川河川事務所の皆様ならびにボランティアガイドの方より、説明を受けました。

淀川のシンボルフィッシュであるイタセンパラの生息が最後まで確認された城北ワンド群は、足元がしっかりしているため、実際に水際まで近づいて見学することができました。講師の河合先生や上原先生による城北ワンド群やイタセンパラに関する説明を聞いたあと、大阪工業大学のご配慮により、当初予定していなかった高層校舎から淀川や城北ワンド群を俯瞰することができました。

大川では、「ふれあいの水辺」として貯木場跡地に整備された砂浜を見学しました。ここでは、大阪府西大阪治水事務所の皆さまから事業の概要などの説明を受けました。さらに、河合先生による投網の実演があり、実際に多くの魚類を確認することができました。

前日まで、淀川河川敷に立ち入れるかわからない中、急な行程の変更にも関わらず、大学キャンパスの利用等を承諾いただきました大阪工業大学に深謝します。



参加者全員で
淀川大堰にて



洪水の影響が残る城北ワンド群
(大阪工業大学 淀ビスタからの眺め)

(2) 船コース (16:00~18:00) (石田裕子)

(講師：伴一郎氏 (伴ピーアール株式会社))

バスコースから引き続き参加される方と、船コースのみの参加の方が合流して、八軒屋浜船着場から大阪市内河川を世界初のリチウム電気船で見学しました。大川 (旧淀川) や土佐堀川、東横堀川の橋梁群を船でくぐり抜け、東横堀川や道頓堀川水門の通航を体験しました。河口では尻無川の巨大な防潮水門を船上から間近に見学することができました。

普段見ることができない大阪市内河川の水際の様子や河川からの大阪の街並みを眺め、水都大阪を体感できた楽しいクルーズでした。



電気船に乗船
八軒家浜乗船場にて



巨大な防潮水門
尻無川河口

3.2.4 研究発表会 (9/19, 20) (古川整治)

(1) 発表件数等

研究発表は、口頭発表 45 件、ポスター発表 70 件の合計 115 件でした。発表件数を第 14 回札幌大会および昨年の第 15 回金沢大会と比較すると、以下のようにやや増加傾向であり（昨年の第 16 回 3 学会合同のため比較の対象外とした）、特にポスター発表件数の増加がみられました。

大会名	口頭発表件数	ポスター発表件数	合計
第 14 回札幌大会	36	68	104
第 15 回金沢大会	43	50	93
第 17 回大阪大会	45	70	115

本大会では、第 13 回埼玉大会と第 15 回金沢大会で行われた英語のみによる口頭発表のセッション（国際セッション）が復活しました。ポスター発表は 9 月 19 日に、半数ずつコアタイムを設定して行い、口頭発表は 9 月 20 日 3 会場で並行して行いました。

(2) 優秀発表賞等

本大会から「応用生態工学会優秀発表賞表彰規定」に従って審査が行われました。ポスター発表では 70 件中 62 件が優秀発表の審査対象となり、10 件が「優秀ポスター研究発表賞」に、2 件が「優秀ポスター事例発表賞」に選ばれました。さらに、これらの 12 件のうち、最も優れた 1 件のポスター発表が「最優秀ポスター発表賞」に選ばれました。口頭発表では、45 件中 23 件が優秀発表の審査対象となり、3 件が「優秀口頭発表賞」に、1 件が「優秀口頭事例発表賞」に選ばれました。さらに、これらの 4 件のうち、最も優れた口頭発表が「最優秀口頭発表賞」に選ばれました。



ポスター会場



表彰式

【ポスター発表賞】

<最優秀ポスター発表賞>

PF-24 『河川における生物生息適地モデルの結果を用いた相補性解析の試み』，発表者：前田義志（前 国土交通省国土技術政策総合研究所環境研究部河川環境研究室（現 国総研河川研究部河川研究室））ら

<優秀ポスター研究発表賞>

PB-9 『宮崎県北川における霞堤防が有する生態的機能の評価』，発表者：富山雄太（九州大学工学研究院）ら

PG-36 『濁水に含まれる無機物の堆積が付着藻類の一次生産性に及ぼす影響』，発表者：宮川幸雄（（独）土木研究所自然共生研究センター）ら

PH-37 『木津川における底生動物生息場としての瀬の変遷の評価』，発表者：小林草平（京都大学防災研究所）ら

PI-50 『四国における河川魚類を対象とした種の多様性の評価』，発表者：香川祥大（徳島大学大学院先端技術科学教育部）ら

PI-57 『ダムのある・なしにおけるアユの食味と藻類群集・水質との関係に関する研究』，発表者：上村嘉彦（徳島大学大学院先端技術科学教育部）ら

PI-59 『中国の中小河川における魚類多様性保全に向けたハビタット-河道特性パラメータの関係性に関する研究』，発表者：佐藤辰郎（九州大学工学研究院）ら

PI-60 『半島マレーシアにおける外来魚の分布状況と土地利用の関係について』, 発表者: 山下奉海 (九州大学工学研究院)

PJ-63 『羽毛微量元素分析を用いた草原棲希少小型鳥類の繁殖地判別』, 発表者: 坂有希子 (弘前大学大学院農生) ら

PJ-65 『国内展示施設における生物多様性展示の現状』, 発表者: 渡辺友美 ((独) 土木研究所自然共生研究センター) ら

<優秀ポスター事例発表賞>

PI-56 『石狩川上流におけるシロザケの産卵適地と探索行動—加速度ロガーによる行動解析事例—』, 発表者: 有賀誠 (明治コンサルタント株) ら

PK-66 『住民参加型の都市河川再生に向けた環境教育アプローチ—マレーシア・ウェイ川における WATER Project の調査事例—』, 発表者: 和田彰 ((株) 建設技術研究所国土文化研究所) ら

【口頭発表賞】

<最優秀口頭発表賞>

D-15 『河川性底生動物が持つ生態系サービス: 藻類食者がシルトの堆積した付着藻類に及ぼす影響』, 発表者: 森照貴 ((独) 土木研究所自然共生研究センター) ら

<優秀口頭研究発表賞>

F-24 『イシガイ類をモデルとした氾濫原再生適正地の抽出手法の開発』, 発表者: 永山滋也 ((独) 土木研究所自然共生研究センター) ら

I-40 『Performance of two invasive vines on contrasting floodplain soils subjected to different flooding regimes』, 発表者: Md. Harun Or Rashid (Department of Environmental Science and Technology, Saitama University) ら

<優秀口頭事例発表賞>

H-34 『地上徘徊性昆虫類の保全を目的とした這い出し側溝の 1 事例』, 発表者: 高柳茂暢 (アジア航測(株)) ら

○選考方法

ポスター, 口頭発表ともに, 審査対象を 1) 若手研究者 (学部学生, 大学院生, ポスドク等の若手会員) および 2) 現場技術者または行政担当者に絞り, そのうち事前に審査対象となることを希望した発表者に限定しました。大会実行委員会および数名の担当幹事により優秀発表審査委員会を組織し, 担当幹事が審査員を選出し, 依頼しました。設定した評価項目に対する得点に基づき, 優秀発表賞審査委員会が受賞者を選考しました。

3.2.5 自由集会 (9/19・9/20) (中井克樹・渡辺敏・笹田直樹)

【自由集会】

本大会では, これまでで最も多い 9 件の自由集会が開催されました。まずは, 素晴らしい集会を企画, 開催していただいた方々に, 心からの謝意を表させていただきます。どの自由集会の会場でも, 参加者の方々が食い入るように発表を聞き, 熱心に意見交換を行っている様子が見て取れ, 自由集会への参加意欲や人気が高いことが窺われました。場所と時間の制約から, 一部同時並行して集会が開催されたため, 全ての集会の盛り上がりは同時に, より多くの集会に参加したかった聴講者の欲求を満たせないという課題でもありました。今後も多くの自由集会が行われることが, 学会の魅力向上につながると感じられるため, 開催スケジュールに関してはもうひと工夫が要求されます。

このような事情から, 大会事務局の自由集会の担当者も, 自由集会のすべてに網羅的に参加することはできませんでした。そこで, 自由集会の開催報告は, 各集会の企画者の方々に執筆をお願いしました。以下に, 各集会の開催報告を続けます。依頼の際に, 具体的にお伝えしていなかったため, 表記方法が不統一となっておりますことにつきましては, 何卒, ご了承くださいますよう, お願いいたします。

■放射性物質動態と流域生態系 (幹事会主催)

9 月 19 日 (木) 9:00~12:00 C3 会場

応用生態工学会幹事会主催の自由集会の一つとして実施された。2011 年 3 月の福島第一原発事故以降, 福島県や周辺地域の水系網における放射性物質の動態や生態系への影響について, 様々なモニタリングや研究が実施されていることから, これまでのモニタリングの実施状況や研究成果について横断的な意見

交換を行った。沿岸域や河川における食物網と放射性セシウムの移行についての現在までの知見、河川や水田、湖沼における放射性セシウムの移動形態について報告があった。総合討論では、研究における対象時間スケールと、今後数十年継続すると予想される環境中のセシウム動態のスケールについて整理していくことの重要性や、生物や食物への影響についての議論が行われた。このような自由集会を継続的に行うことにより、今後の放射性汚染対策における工学と生態学を融合した流域管理の視点などを応用生態工学会として検討することが可能であると思われる。



(報告：東京農工大 五味高志)

■震災と環境対策（幹事会主催）

9 月 19 日(木) 16:00~19:00 C3 会場

『震災と環境対策』は東日本大震災における応用生態工学会の今後のサポートのあり方等を議論することを目的に、幹事会主催の自由集会として開催された。最初に河口洋一（徳島大学）が自由集会の主旨を説明し、引き続き、萱場祐一（土木研究所）、常山修治（東北地方整備局）、平吹喜彦（東北学院大学）、横山勝英（首都大学東京）が震災復興に関する現状と課題について報告した。震災関係のディスカッションを行うのは本学会では初めてのこともあり、会場からは以下に示すような様々な視点に立った意見が寄せられた。



学会の対応

- ・ 現場に近い応用生態工学会が何らかのアクションを起こすべきだった。
- ・ 学会としては、会員の各ネットワークを活用して、応用生態工学本来の持ち味の枠組みを示すことが大切である。

復興の方法

- ・ 日頃の環境保全に関する技術の蓄積が震災時に活かされている。
- ・ 大規模攪乱時に生物はレフュージアを利用するので、こういった場所の消失を防止する。
- ・ 大規模攪乱時はレジリアンスが低下しているので、復興時には相当の配慮が必要である。
- ・ 事業によっては生育・生息する生物に相当な影響を与えているものがある。
- ・ 堤防機能だけに依存することには無理がある。

組織・制度上の問題

- ・ 大規模災害時に社会を俯瞰的かつ冷静に見ることができる組織が必要である
- ・ 見直しが出来た制度を設計することが大切である。

当学会としては、これらの意見を参考にしながら、今後も引き続き情報交換を行いながら、論点整理を行いながら、今後の備えについて充実を図って行きたいと考えている。

(報告：土木研究所 萱場祐一)

■河床の見方 -水工学と生態学、河川中上流域を中心として-

9 月 19 日(木) 16:00~18:00 C2 会場

「水理学と生態学」という話題は、本学会で度々話し合われてきたテーマであるが、本自由集会は、現象の解明に双方の分野の知見の融合がより強く求められるであろう礫床河川に対象を絞り、「水理学と生態学が共通の議論を高めていくための鍵」について、多数の参加者とともに、今後の具体的な方向性を議論した。まず、礫床河川の河床に関する国内外の研究動向について概観が紹介されるとともに、問題提起がなされた。3 題の話題提供では、①生態学的・河川工学的な河川空間の捉え方の概観と課題、②水理学と生態学の視点に立脚した研究事例、③流域構成地質の違いが河道景観や底生動物相に与える影響に関する研究事例が紹介され、総合討論に向けて重要な論点が複数提示された。総合討論では、今後の礫床河川における調査研究について、より具体的な取り組みの方向性が見出された。一つ目は、着目する場と現象の時空間スケールについて、水理学・生態学双方の記述の仕方を互いに理解し、対象の



スケールをより明確に意識することが、共同研究を効果的に推進するための近道であるとの方向性が示された。二つ目に、水理学側から、生態学的な現象の記述に即した水理学（生態水理学）、河床の構造に注目した調査研究（河床構造学）を展開していく方向性が示された。これら、二つの方向性については、集会参加者を中心に、継続的に議論を進めていく所存であり、今後具体化を図っていく。

（報告：土木研究所 原田守啓）

■震災復興に応用生態工学はどのような貢献ができるのか：岩手県大槌町での取り組み

9 月 20 日(金) 15:30~17:30 C1 会場

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災からの復興事業に、応用生態工学はどのような貢献ができるのか、を論点として、2013 年 9 月 20 日に本自由集会が開催された。集会では趣旨説明（森誠一氏）を受け、生態（久米）・遺伝（北野潤氏）・水理（鷲見哲也氏）の視点から、岩手県大槌町が誇る湧水生態系に震災・津波が与えた影響について報告された。これらを受け総合討論の冒頭では、大槌町役場の佐々木健氏より、大槌町の文化と現状をご報告いただいた。被災当事者の生の声を聞く機会は限られており、被災地の今をよりリアルに実感することができたかと思う。しかし、ここで時間がなくなってしまい、数名の方にコメントを頂くに留まってしまった。当日は約 50 名の方々にご参加いただいた。ご参加いただいた方々には御礼申し上げますと同時に、時間の制限もあり十分な議論ができなかったことをお詫び申し上げたい。参加者の皆さまにとって、有益な情報を提供でき、有意義な時間となったならば幸いである。



（報告：岐阜経済大 久米学）

■ダム下流生態系

9 月 19 日(木) 16:00~18:00 C1 会場

本自由集会では、水源地生態研究会の 1 グループとして辻本哲郎（名古屋大学）をリーダーとして進めてきたダムの下流生態系への影響と保全策の評価についての 5 年間の成果について議論を行った。ダムは河川の様々な要素（水、土砂、栄養塩、有機物など）のフラックス（経路と輸送量）を変化させることで下流生態系に影響を与える。ここでは、河川の潜在的な特性を踏まえ、ダムや下流河道におけるフラックス変換、下流生態系の変質について報告し、議論を行った。季節性や強度など様々な特性をもったフラックスの何がどのように変換されるのか、潜在特性・フラックス変換・影響の有機的な結合について意見交換が行われた。実際の河川・ダムにおいて評価・対策が可能な形にするのが今後の課題になるだろう。



（報告：水源地環境センター 一柳英隆）

■ダム湖エコトーン（水位変動帯）の応用生態工学

9 月 19 日(木) 9:30~11:30 C2 会場

本自由集会では、ダム湖水位変動帯に形成される生態系に関連する議論を行った。まず、エコトーンという場の特性について生態学的な再整理を行い、続いて植生や動物相の形成、物質循環などについて 4 題の話題提供を受けた。その後、水位変動帯（とくにダム湖河川流入部）の基盤形成と類型、水変動帯の植生と水質との関わり、生物多様性保全の場としての活用について議論が行った。かつて、ダム湖水位変動帯における研究は、景観や濁水対策としての裸地化問題が中心であった。今回の議論は、もっと積極的に生物多様性保全の場などへ活用できる可能性を意識したものであり、今後の新しいダム管理につながれば幸いである。



（報告：水源地環境センター 一柳英隆, 応用地質 浅見和弘）

■小さな自然再生が中小河川を救う! II

9 月 19 日(木) 9:30~11:30 C1 会場

本自由集会は、河道内における比較的小規模の自然再生手法(=小さな自然再生)に焦点を当てたもので、昨年の開催に引き続き第 2 回目として実施されました(参加者数 42 名)。本自由集会では、福岡福津市上西郷川における事例紹介や、(独)土木研究所自然共生研究センターで取り組まれている瀬淵環境再生のため工法に関する研究動向などについて話題提供が行われました。会場では、①多自然川づくりの中での小さな自然再生の位置づけや、②小さな自然再生を実施する上での課題と可能性について、活発な議論が行われました。その結果、普及促進には、“小さな自然再生”を川づくりの制度として位置付けて技術基準をつくるなどの、行政的なアプローチが必要であることや、多自然川づくり・河川の維持管理・小さな自然再生(環境管理)は、3 つを一体のものとして捉えることが重要であること、小さな自然再生の計画論(目標設定)・方法論(メソッド)・効果判定が課題であることなどといった共通認識を得るに至りました。多数の方々にご参加いただき、建設的な議論をしていただいたおかげで、実りの多い集会となりました。ありがとうございました。来年も引き続き第 3 回を実施したいと考えています。



(報告：九州大 林博徳)

■応用生態工学会 テキスト刊行委員会

9 月 20 日(金) 15:30~17:30 C2 会場

テキスト刊行委員会では応用生態工学会の会員サービス向上を目的とし、会員向けのテキスト刊行を企画している。本自由集会は、初刊となる「河道内氾濫原の保全と再生」の概要を示すとともに、その内容について学会員とディスカッションを行い、テキストに反映することを目的とした。最初に河口洋一(徳島大学)から目次紹介を行った後、本編の主たる章となる 2 章、3 章、4 章について永山滋也(土木研究所)、萱場祐一(土木研究所)、根岸淳二郎(北海道大学)、三宅洋(愛媛大学)が概要を説明した。また、発刊の方法について西浩司(いであ株式会社)が説明した。ディスカッションでは、学際領域に相応しい氾濫原の定義、氾濫原に依存する生物種の記載、土砂供給量の減少と氾濫原の劣化との関係、氾濫原の開発の社会的背景等について明示して欲しいという意見を頂いた。また、河道掘削と親和性の高いことを踏まえ、河道掘削を活用するという視点が重要であるという意見、発刊については早めに出版社数社に当たり発行に向けた作業や費用について確認すると良いとの意見を頂いた。今後、これらの意見を踏まえ、できるだけ早い時期にテキストの発刊を行いたいと考えている。



(報告：土木研究所 萱場祐一)

■汽水域における空間分布モデル

9 月 20 日(金) 15:30~17:30 C3 会場

汽水域生態系の保全・自然再生を目標とした空間分布モデルについての 4 演題の後、総合的な生息場管理を実行する上での課題の抽出をおこなった。議論によって浮き彫りになった課題は様々であったが、①広域スケールでの生物の分布データの集め方と解析手法について、②詳細スケールでの物理環境のシミュレーションについての 2 つに区分できるだろう。①については、既存の調査手法ではカバーしきれなかった種・分類群のデータを精度良く取るためのマニュアル作りや、モデルが得意な研究者と野外採集が得意な研究者の協働が重要であるという結論に至ったが、②については、集会中では具体的な解決策にまでは至らなかった。汽水域工学というものがないことが大きな理由であろうが、幸いなことに、本集会には多くの工学研究者に参加して頂けた。今後、それらの方々と、汽水域を研究するモチベーションについて議論できる機会が設けられればと考えている。



(報告：徳島大 乾隆帝)

3.2.6 懇親会(9/20) (高萩 浩史)

本大会の懇親会は、大会会場である「大阪府立大学 I-site なんば」の会場の一部をそのままお借りして

開催しました。おかげさまでもちまして参加者の大移動をなくすことができ、迷子者・遅刻者を一人も出さずに懇親会を始めることができました。一般発表や自由集会が行われている時間帯に、料理の良い匂いを会場に漂わせながら準備を行いましたので、大会参加者も気もそぞろだったのではないのでしょうか。

懇親会は、池淵実行委員長の開会宣言に始まり、近藤会長の挨拶、大阪府立大学副学長兼なんばセンター長の石井氏による歓迎挨拶のあと、森下郁子氏の乾杯で幕を開けました。翌日の公開シンポジウム講師紹介、次回開催予定地の紹介などを交えながら、メニューにきつねうどんを盛り込んだケータリング料理、普及・連携委員による郷土料理やお酒、ご歓談途中に突然挿入した焼きたて大阪名物たこ焼きをご賞味いただくなど、あっという間の 2 時間半でした。最後に、谷田実行副委員長の中締めで参加した皆様は一旦、会場を後にされ、懇親は場を変えて続いた様子でした。



3.2.7 公開シンポジウム (9/21) (森川 裕之)

進行 綾史郎 (大阪工業大学教授)

(基調講演)

Yeon Jae, Bae (高麗大学教授, 韓国)

公開シンポジウムは、『都市河川の自然再生と防災を考える』と題し、平成 25 年 9 月 21 日(土)に大阪府立大学 I-site なんばで開催された。

最初に池淵周一実行委員長からテーマの『都市河川の自然再生と防災を考える』の説明を含め開会の挨拶が行われた。基調講演は、Bae 教授より「韓国のソウルにおける清溪川自然再生事業後の水生生物群集の変化 (2005 年～2013 年)」と題し、清溪川 (チョンゲチョン) の再生事業という、韓国の環境行政において一つの記念碑的な意味合いを持つプロジェクトについて、清溪川の再生とそれに伴う生物相の変遷についての発表がおこなわれた。パネルディスカッションは、綾教授がコーディネーターを務め、都市河川の自然再生と防災を考えるテーマに沿って以下の 4 人から話題提供がおこなわれた後、ディスカッションが行われた。



(話題提供)

「津波による河川災害と環境の回復過程」田中 仁 (東北大学教授)

「水都大阪の景観」増田昇 (大阪府立大学教授)

「流域スケールの自然再生」竹門康弘 (京都大学准教授)

「都市河川の自然再生と防災」島谷幸宏 (九州大学教授)

田中教授から東日本大震災の津波が及ぼした河川での特有な被災の状況と七北田川河口部蒲生干潟の環境の回復過程についての話題提供がなされた。増田教授から水害との闘いの歴史の中で、都市と河川がどうかかわってきたかについて、大阪を事例に話題提供がなされた。竹門准教授からは直前の台風 18 号による淀川水系の浸水状況の報告があり、淀川の土砂動態などを例に流域スケールから、災害や自然再生についての話題提供がなされた。島谷教授から都市河川の自然再生と防災の両立を図った具体的事例についての話題提供がなされた。



(パネルディスカッション)

パネルディスカッションでは以下のような具体的な意見があった。(抜粋)

- ・ 自然再生プロジェクトには、生態学的な観点、工学的な観点の両方が重要である。
- ・ 治水安全度がある程度上がっていく中で環境的議論がなされはじめている現状に対して、応急処置、ランドデザインの段階から環境的議論をとりいれるべきである。
- ・ 自然再生的な観点のデザインがより安全度を高めるといった発想も必要である。
- ・ 防災と環境の対立図式ではなくて、防災のあり方をどのように今後検討していくかという中で、いくつかの選択肢に対して、環境の配慮を考えていくべき。
- ・ 都市河川の価値は、災害や水質汚濁の発生源であるというマイナス価値を持った時期が長く、それに対し防災や水質改善などを行い、マイナスからゼロに戻し、人間が利用することで、プラス価値を発生させたのが現段階である。
- ・ 都市においては空間を使い切らないゆとり、オープンスペースの仕組みを持つことが付加価値を生み出す。
- ・ ランニングコストを考えていくと自然に回帰させるほうが効率的かもしれないという発想も必要である。
- ・ 自然再生には、スペースを使い切らなくても価値があるといった価値観にどう社会的合意を形成することが重要である。
- ・ 将来の都市人口減少、生まれる空間を環境上、保水に利用するという考え方と方策の考える時期にきている。
- ・ 下水道の仕組みとかも抜本的に考え直していい時期にきている。雨水を地下に入れず、一部を表流水で流すといった考え方もあってよい。
- ・ 都市構造そのものを見直す時期に来ており、自然に立脚した土地の使い方、在り方みたいな議論も必要である。
- ・ 基礎的なインフラの整備ができていることが前提になる。
- ・ 自然再生にかかわる市民の運動とか市民参加というものが行政に訴え、行政を動かす。
- ・ 災害時には環境と防災というと、現状では行政は防災のほうにかなりシフトしている印象で、環境寄りにマインドシフトが必要である。

以上のような議論を踏まえ、都市河川において自然再生と防災を両立させる必要を改めて確認しました。さらに、それを実現するためには、市民が行政を動かし、専門家がそれを支援するようなシステム作りが必要であることが確認され、改めて応用生態工学が担うべき役割の重要性を認識する機会となった。

3.2.8 おわりに (実行委員会副委員長 谷田一三、藤原宣夫)

コンパクトな会場での大会開催は大きな混乱もなく無事終了できました。

大会会場をご提供いただき、各種便宜を図っていただきました大阪府立大学 I-site なんばの関係者の皆さまにお礼申し上げます。大会の運営をいただいた実行委員の皆様には、長期間にわたる準備、分刻みのスケジュールでの会場の入れ替えなど、無理難題をお願いしたにも関わらず、快く引き受け、解決いただきましたこと関西の心意気を実感するとともに、深く感謝いたします。また、大会全般にわたる的確なアドバイスをいただきましたアドバイザーの皆さまに深く感謝いたします。

大会時、大会後に運営等についての改善点について多くのご意見をいただいております。次回大会に活かされるよう引き継ぎたいと考えます。

実行委員長 池淵周一

副委員長 谷田一三、藤原宣夫

実行委員 (順不同)

綾史郎、竹門康弘、中井克樹、石田裕子、村上広、習田義輝、鍛冶塩太、森川裕之、渡辺敏、白井宏尚、山下康博、藤原正季、笹田直樹、佐貫方城、木本紀子、山口祥伸、鈴木浩生、川越幸一、宮崎晶、高橋健夫、面谷知世、木下長則、細井衛、山崎俊哉、中村圭輔、寺元匡寛、真間修一、田中浩樹、野地貴弘、堀家健司、山本晃一、井上健彦、伊丹雅昭、高萩浩史、漆谷悟、南野龍平、小林卓司、手塚日出子、千葉秀之、杉山彰敏、竹内義幸、藤本和幸、高氏つぐみ、吉岡裕嗣、宇田耕一郎、篠原真樹、佐藤昌岳、池田欣子、西井一浩、山賀由貴、澤田直、

野々山一彦,
伊藤正美, 赤桐さやか, 増渕勝也, 川谷逸樹, 松井達司, 小笠原豊, 森下祐, 古川整治,
厨子和典
アドバイザー

小俣篤 (国土交通省近畿地方整備局河川部)
吉村庄平 (大阪府都市整備部河川室)
栗田秀明 (一般社団法人 建設コンサルタンツ協会近畿支部)

4 理事会 (幹事会) ・委員会 報告

4.1 理事会報告

4.1.1 第66回理事会

日 時 : 2013 年 8 月 23 日 (金) 10 : 00~12 : 00

場 所 : 弘済会館 4階 梅 (東)

出席 : 近藤会長、谷田副会長、中村副会長、浅枝理事、河崎理事、久保田理事、熊野理事、小島理事
島谷理事、玉井理事、藤原理事

藤田幹事長

事務局 : 小川事務局長

- ①【審議事項- 1】2012 年度決算を審議し、以下の指摘があり、修正等を行うことで承認された
 - ・未収入会費の額を特定し、これを未収金扱いとする経理を実行すべきとの指摘があり、今後事務局と共に「財政、経営、運営班」で検討することとなった
 - ・一般会計収支と、特別会計収支の説明表が見にくいとの指摘があり、修正した。
- ②【審議事項- 2】2014 年度予算 (案) を審議し、以下の修正を行うことで原案を承認した、
 - ・英文誌広告掲載費は、今後は I C L E E 収入とする方向であるので、減額計上する。
 - ・会誌編集費の節減方策について、事務局と会誌編集委員会との連携を図り検討することが指示された。
- ③【審議事項- 3】第 9 期幹事長および幹事候補推薦 (案) が審議され、原案で承認された。
- ④【審議事項- 4】会誌投稿規程 (案)、会誌校閲規程の改定 (案) が承認された。
 - ・新しい論文カテゴリである「レポート」の新設に関する改訂一会誌 16-1 及びホームページを参照

⑤ 報告事項

藤田幹事長から、以下の 14 項目についての状況報告があった。

- 【報告事項- 1】 第 56 回幹事会報告
- 【報告事項- 2】 第 9 期次期役員募集・推薦委員会報告
- 【報告事項- 3】 理事—幹事担当性
- 【報告事項- 4】 テキスト刊行委員会報告 [学術成果総括班]
- 【報告事項- 5】 海外学会等への派遣者募集要領 (改定案) [国際交流/ICLEE 対応班]
- 【報告事項- 6】 研究発表会での 賞 について [調査・研究活動奨励班]
- 【報告事項- 7】 会誌編集委員会報告
- 【報告事項- 8】 第 17 回大会案内 (大阪大会)
- 【報告事項- 9】 大規模災害からの復旧と環境保全・復元への応用生態工学の貢献検討報告

(大阪大会【幹事会主催】自由集会企画)〔特命班〕

【報告事項- 10】ICLEE 対応についての最近の状況〔国際交流/ I C L E E 対応班〕

【報告事項- 11】情報サービス委員会報告〔広報班〕

【報告事項- 12】〔財政、経営、運営班報告（＝事務局改善 WG の発展形）〕

【報告事項- 13】会員数報告

【報告事項- 14】河川砂防技術基準改定と学会との連携取り組みに関する参考情報

報告事項（14 項目）に関する追加報告事項および理事会の意見

【報告事項- 5】海外学会等への派遣者募集要領(改定案)

藤田幹事長から、直前情報として、2013 年度派遣決定者が、ご家庭の事情で直前になって急遽、海外学会出席が出来なくなり、国際交流委員会ではこれを承認した結果を報告した。

【報告事項- 6】研究発表会での 賞 について

賞の選定に当たっては、応用という名前がついた学会であるから、応用生態工学的なもの以外は対象にすべきではない、すなわち 5 つの審査項目の一番目にある「応用生態工学的な論点の明確さ（応用生態工学的な位置づけが妥当か?）」を他の審査項目に優先させるべきであるとの意見が出された。

【報告事項- 8】第 17 回大会案内（大阪大会）

運営を担当されている谷田副会長、藤原理事から、大会の準備状況の報告があった。

【報告事項- 10】ICLEE 対応についての最近の状況

中村副会長から、関係学会との調整状況が報告された。

【報告事項- 12】〔財政、経営、運営班報告〕

久保田理事から、賛助会員等への参加要請活動の状況が報告された。

確認事項

「大会時に開かれる役員会、委員会の自費参加」は第 57 回理事会で申し合わせたものであるが、大阪大会も目前であり、一部には徹底していない向きもあるので、理事会で確認を頂き、幹事会、各委員会に周知することとした。

4.1.2 第 67 回理事会

日時：2013 年 9 月 21 日（土） 9:45 ～10:25

場所：大阪府立大学 I-site なんば A-1 会場

出席：近藤会長、池淵副会長、谷田副会長、中村副会長、浅枝理事、河崎理事

熊野理事、島谷理事、関根理事、藤原理事、松井理事、渡辺理事 藤田幹事長

事務局：小川事務局長

①【報告事項-1】 第 57 回幹事会報告

国総研から提案されている「河川砂防技術基準をベースとした河川技術の検討に関する学会との連携」について、国総研からの呼びかけについて報告した。理事会意見としては、幹事会において基本的スタンス、具体的方法について検討のうえ報告を求めることとした。

②次期大会総会開催地について意見交換があり、次期開催地は東京近郊をイメージした認識が出されたが、今後詰めることで了承された。

4.1.3 第 57 回幹事会議事録

日時：2013 年 9 月 21 日（土） 9:00～9:40

場所：大阪府立大学 I-site なんば A-1 会場

出席：藤田幹事長、萱場副幹事長、仮谷幹事、河口幹事、坂之井幹事、島崎幹事、高橋幹事

田代幹事、三宅幹事

小川事務局長

①【審議事項-1】応用生態工学会が関わる、沿岸環境関連学会連絡協議会との関係整理

- ・沿岸環境関連学会連絡協議会は 14 学会がメンバーとなり運用されているが、学会としての対応方針などを議論した経緯がない。会員からの要請によって、位置づけを審議したが、情報が不足しており、次回幹事会で議論することとなった。

4.1.4 第 58 回幹事会、第 68 回理事会合同役員会

日時：2013 年 9 月 21 日（土） 12:10～12:50

場所：大阪府立大学 I-site なんば A-1、A-2

出席：幹事会

藤田幹事長、萱場幹事、仮谷幹事、田代幹事、藤井幹事、三宅幹事

沖津幹事、佐川幹事、東城幹事、中村幹事、横山幹事

理事会

谷田会長、中村副会長、島谷副会長、浅枝隆理事、河崎和明理事、藤原宣夫理事

島崎由美理事、清水義彦理事、角哲也理事、関克己理事、成田賢理事

渡邊康玄理事

事務局：小川事務局長

① 副幹事長の任命

応用生態工学会規約第 12 条 5 項の規定により、幹事会で推薦された萱場幹事を、会長が副幹事長に任命した。

② 会長職務代行者の指名

応用生態工学会規約第 10 条 5 項の規定による会長職務代行者に、会長が中村副会長を指名した。

4.1.5 応用生態工学会 第 59 回幹事会

日時：2013 年 12 月 4 日（水） 14:00～16:30

場所：麴町学会事務所

出席：藤田幹事長、萱場副幹事長、仮谷幹事、沖津幹事、東城幹事、中村幹事、西廣幹事

事務局：小川事務局長

①【報告事項】第 18 回大会に向けた準備の状況

- ・東京大会準備会に参加している東京連絡責任者 久保市浩右氏から、以下の内容の報告があった。

準備会を 3 回（平成 25 年 9 月 21 日、10 月 10 日、10 月 31 日）断続的に開催し、開催素案が示された。

開催場所：首都大学東京、南大沢キャンパスで調整中

開催日時 : 平成 25 年 9 月 18 日 (木) ~20 日 (日) (エクスカージョンを含まず)

実行委員長 : 調整中

河川整備基金申請 : 11/29 申請済み

②【審議事項】理事-幹事担当制

- ・「理事-幹事担当制への移行」は、2013 年 6 月 5 日開催の第 65 回理事会で幹事会から提案され、了承されたものであるが、新役員での担当素案を審議した。今後各役員とも調整のうえ、担当制を次回の理事会に提案することとなった。
- ・幹事長は、欠席した幹事とも意見を交換し、理事会までに役割分担表を調整することとなった。

幹事会で審議した班編制素案は、以下の通り

i 財政・組織運営班

賛助会員でこ入れ、一般会員・学生会員増でこ入れを行うとともに、資金増案出・実行、法人化の検討を行う。

ii 学術成果総括活動班

応用生態工学で得られた知見を整理し、会員向けに提供する。

iii 研究活動奨励班

学会の研究のあり方を整理し、学会誌の方向性、賞のあり方や具体的内容を検討する。

iv 技術援助活動班

応用生態工学の知見を現場に導入することを目的に、その仕組み等を整備する。

v 広報班

学会のプレゼンス強化、会員サービス向上を目的として情報発信の方法等を検討する（HP 管理、ニュースレターのあり方改善を含む。）。

vi 全国活動運営班

応用生態工学会の活動を全国に展開する上での戦略と具体的な内容を検討する（全国大会運営の基本方針、地域研究会のあり方、実勢分析を含む。）。

vii 国際交流／ICLEE 対応班

viii 中期計画対応班（新設）

第 3 期中期計画の評価と次期中期計画の策定について検討する。

ix 特命班

学会で解決すべき課題をアドホックベースで取り組む。短期間で解決。

ひとまず、特命班 1 において、東日本大震災対応を含む大規模災害からの復旧と環境保全・復元の課題に取り組む。

- ・理事-幹事担当制の当面の進め方のイメージ

各班は、幹事会資料等の作成を行い、幹事会に持ち寄り議論する。その結果を事務局長のサポート＋追加（事務局案件）を経て、理事会資料とする。

各班は、関係する委員会と連携する。

③ 【審議事項】応用生態工学会が関わる、沿岸環境関連学会連絡協議会との関係整理

- ・今回審議事項として取り上げ、まずは状況を認識、今後の進め方について萱場副幹事長が協議会に出席している会員に対して確認することになった。

④ 【審議事項】河川砂防技術基準改訂と学会との連携

- ・砂防技術基準改訂の今後のロードマップ等を把握した上で、対応方針案を議論し、対応班を編制するなどの具体的対応方針を決めて、次回の理事会に諮ることにする。

⑤ 【審議事項】中期計画の評価と次期計画策定

- ・2013 年度で第 3 次中期計画が完了する。一方 2014 年 9 月の大会では 2015 年度予算を設定する必要があるが、この設定に際して、中期計画の評価と時期中期計画を反映させることが出来るかなど、作業可能量と評価の質を考慮し作成した中期計画評価及び次期中期計画策定工程表 原案について審議した。
- ・意見交換の結果、評価作業はシンプルな評価で目的は達成できるとして 2013 年度内に各委員会から第 3 次中期計画期間内の成果について報告を受け取り、これらを取りまとめて理事会審議のうえ、2014 年度総会に報告する。また、並行して次期中期計画の策定作業を開始し、2014 年度総会において概略の方針を報告し、その一部は 2015 年度予算に反映させる。以上のような短縮案を理事会に提案することとし、担当幹事に予定されている田代幹事を中心に、将来構想委員長の谷田会長の指導を受けながら検討し、次回の理事会に報告するスケジュール案を作成することに決定した。
- ・この検討にはすべての委員会が対応する。

4.2 委員会報告

■ 第 2 回 普及、連携委員会

日時 : 2013 年 9 月 20 日

場所 : 大阪府立大学 I-site なんば

出席者 : 竹門委員長、小川事務局長、中井委員（連携）、岩瀬委員（札幌）、久保市委員（東京）

佐渡委員（富山）、澤委員（石川）、松井委員（長野）、柴田委員（長野）

中村委員（名古屋）、厨子委員（大阪）、川越委員（松山）、酒井委員（福岡）

協議、決定した事項

① 5 カ年計画の総括

今年度末に向けて現行五カ年計画の総括を行う

事務局で、年度別、地域別の会員動向を整理する

② 助成金の用途決定

石川（今年度行事「勉強会 多自然川づくり in 石川」）：5 万円

福井（今年度行事「北信越現地ワークショップ 1 in 福井」）：5 万円

長野（次年度行事「への準備作業費」）：5 万円

富山（次年度行事「北信越事例発表会への準備作業費」）：5 万円

四国（次年度行事「フィールドシンポジウム」への準備作業費）：5 万円

九州（次年度行事「への準備作業費」）：5 万円

合計 30 万円

③ 検討が必要な事項

地域ワークショップのテーマとして、専門性の追求、一般へのアピールが必要である

連携部門の枠組みや仕組みが決まっていない

連携については、次の 5 力年に向けてのアイディアが必要である

普及については、今後も継続的な地域活動が必要である。

■ 国際交流委員会報告

日時：平成 25 年 9 月 20 日（金曜日）

時間：12 時 15 分から 13 時 00 分

場所：なんば I-site S1 会議室

出席：中村委員・知花委員・石澤委員・河口委員・五味委員長

- ① 次期国際交流委員会への引き継ぎ事項：国際交流委員長および委員の交代（委員規定により 2014 年 4 月 1 日から交代）があることから委員の交代をスムーズに行うように進めることを確認した。また、引き継ぎ事項としては、海外派遣の応募・決定プロセスの一部変更や国際シンポジウムの実施、国際誌への対応などがあることを確認した。
- ② 2013 年海外派遣者の辞退の報告：2013 年度の海外派遣者について、都合により派遣予定であった、国際会議に出席できなくなり、派遣の辞退の申し出があった旨を報告した。
- ③ 国際シンポジウム：平成 25 年度中に実施のシンポジウムの進捗など報告について。
流域生態系と放射性物質動態に関連する国際シンポを 3 月に実施予定で近日中に案内を送付予定。

5 行事開催報告

5.1 第 5 回応用生態工学会 フィールドシンポジウム開催報告

平成 25 年度 応用生態工学会札幌セミナー
第 5 回 応用生態工学会 フィールドシンポジウム

本来の川を取り戻すために・・・その 8

水・土・緑（生物）をレジームで捉える

●開催趣旨

レジーム…。「アンシャンレジーム（歴史）」、「戦後レジーム（政治）」、「レジームシフト（科学）」等々…。どこかで『レジーム』という言葉聞いたことがあると思います。

本シンポジウムは、『レジーム(体制、仕組み、基本構造)』という大局的な見方で、砂礫河川のメカニズムの一端について講演と現場を通じて考える機会です。

土地利用や上流に造られたダムは、河道やその周辺の水・土砂・緑(生物)に少なからず影響を与えています。相互に関連しながら時間をかけて、その影響に応答しながら適応しつつ、現在の河川環境が形成されています。今は、知らぬ間に『レジーム』が変わったのか、もしくは、変わりつつあるのかもしれませんが。

応用生態工学会では、現場のニーズに応じた研究テーマの発掘等を目的に、全国大会とは別に各地で“フィールドシンポジウム”を開催しています。今回(5回目)は、十勝川水系札内川で行われている“かわら”再生の現場を視察しました。川の要素である水と土砂と緑(生物)のトータルをレジームとしてとらえ、土砂水理学や河川生態学及び河川管理の目による分析を試みました。

●シンポジウム

1. シンポジウム概要

日 時：平成 25 年 8 月 26 日(月) 11:00~17:30

場 所：札幌エルプラザ

共 催：(独)土木研究所 寒地土木研究所

参加費：2,000 円

参加者：122 人

(内訳)

- ・ 学生 9 名／研究機関 31 名／行政 12 名／コンサルタント 68 名
- ・ 男性 108 名／女性 14 名
- ・ 道内 105 名／道外 17 名

2. 講師

○基調講演

石城 謙吉 北海道大学名誉教授

○講演・研究紹介

中村太士	北海道大学大学院農学研究院 教授(趣旨説明)
泉 典洋	北海道大学大学院工学研究院 教授
田代 喬	名古屋大学大学院環境学研究科 准教授
南 哲行	北海道大学農学研究院 特任教授
根岸淳二郎	北海道大学地球環境科学院 准教授
永多朋紀	寒地土木研究所 寒地河川チーム 研究員

○司会・振興

総合司会 伊藤 丹 寒地土木研究所 寒地河川チーム 上席研究員

総合討議コーディネーター 吉井厚志 寒地土木研究所 特別研究監

3. 講演内容

○基調講演

「次世代に語り継ぎたいこと ～川は生きている～」

(北海道大学名誉教授 石城謙吉)

河川は、陸地と海の水の均衡を維持するという重要な役割を担っており、その水は、土、緑(植物)と互いに連関して、「川」、「森林」、「森林土壌」という陸地の自然における最も重要な生命の拠点をつくりあげてきた。これらの生命の拠点では、さまざまな生態系が成立しており、それぞれ独自のシステムを持っているものの、お互いが連関しあっていることについて指摘された。特に川(河川生態系)と森(森林生態系)の関係については、氏が勤めておられた北海道大学苫小牧研究林における研究成果の紹介があった。また、現在の問題として、川を例にとり、人工技術に傾倒した合理主義にもとづく、川の改変・制御が進められた結果、生態系の基本構造や相互の連関が失われてしまったとの指摘があった。そのうえで、人為的に単純化することに向かってひた走ってきた自然に関する技術を見直し、今後は、生態系の修復と維持、それぞれの連関の復活に向けて発展すべき

と指摘された。そのキーワードは、「改変と制御ではなく、共生と共存である。」と。

○講演・研究紹介

①シンポジウムの趣旨説明

「水・土・緑(生物)をレジームで捉える ～問題提起に変えて～」

(北海道大学大学院農学研究院 教授 中村太士)

応用生態札幌 代表

シンポジウムの趣旨として、我々を取りまく環境(自然環境、社会環境等)の仕組みが大きく変わりつつある、または変わってしまった可能性について指摘し、その点を踏まえたうえで、川や土砂、緑(生物)との向き合い方を考えていく必要がある。自然環境が大きく変わってしまった事例として、100 年前の禿山の緑あふれる山への変貌、河床低下や氾濫原の樹林化、礫河原の減少といった川の変貌に関しての紹介があった。

②河床形態、河道形状のレジーム論

(北海道大学大学院工学研究院 教授 泉典洋)

リップルやデューン、アンチデューンといった河床形態もレジームシフトの一例である。これらが、どのような水位・流量・流速で発生するか、また、同一条件下でも異なる河床形態が現れる現象等、実験の実験画像等と合わせながら分かり易く解説された。また、河道断面形状についても論じられ、礫床河川と砂床河川の断面形状維持のメカニズムおよび過去に使われていたレジーム公式について説明があった。

③流域地質構造が供給土砂を介して河川景観、水生生物に及ぼす影響

(名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 田代喬)

地質区分が異なる 3 つの河川(領家帯(火成岩(花崗岩)類)を流れる仁柿川、三波川帯(変成岩類)を流れる相津川、秩父帯(堆積岩類)を流れる蓮川)ごとに、河床堆積物の摩耗破碎特性、河川の縦断形状の凹型傾向を解析し、底生動物群集の分布に与えている影響についての研究事例の紹介があった。本研究の結果、河川縦断形は必ずしも磨耗破碎特性と分級作用だけで決まるとは限らず、流砂の岩質も制限要因であることがわかった。

④これからの砂防

(北海道大学農学研究院 特任教授 南哲行)

かつて日本の山地には荒廃地が広がり、災害が頻発する原因となっていた。治水三法の制定とそれにもとづく流域整備が進められ、効果をあげてきた。その一方で、近年は深層崩壊等の大規模土砂災害が発生しており、発生傾向を示す全国マップ、地域別の相対的な危険度マップの作成・公表といった新たな対応が図られている。また、住民参加や NPO・ボランティアとの連携といった従来とは異なる砂防事業について紹介があった。

⑤生育場環境の時空間変異と生物応答

(北海道大学大学院地球環境科学院 准教授 根岸淳二郎)

応用生態札幌 副代表

氾濫原の量と質は、地形と流況の相互作用で決まることを示し、この氾濫原レジームの経年変化の定量評価(可視化)の試みについて説明し、自然再生事業における目標設定や評価等に有効であることを述べた。そのうえで、木曽川の氾濫原レジームの変化(=樹林化に伴う冠水頻度の変化)が、有機物動態に影響を与え、重要種イシガイの餌資源や溶存酸素を変化させている研究事例が紹介された。

⑥札内川における水生生物の生育環境改善について

(土木研究所寒地土木研究所 研究員 永田朋紀)

シンポジウム翌日の現地見学会で行く札内川におけるハナカジカを指標種とした生息環境評価(PHABAIM)の研究事例が紹介された。評価基準等に課題は残るものの、札内川の礫河原の再生を

目的とした人工フラッシュの結果、ハナカジカの生息適地（CSI 値）が変化し、一定の改善効果があった。

●懇親会

参加者：33 人
場 所：アスペンホテル
日 時：8 月 26 日（月）18:00～20:00
会 費：4,500 円

●フィールドツアー

1. 概要

日 時：平成 25 年 8 月 27 日（月）8:00（札幌駅）～17:00（帯広）
場 所：十勝川水系札内川（札内川ダム～十勝川合流点）
共 催：(独)土木研究所 寒地土木研究所，氾濫原研究会
協 力：国土交通省北海道開発局帯広開発建設部
参加費：3,000 円
参加者：54 人（バス 1 台）
（内訳）
・学生 7 名／研究機関 12 名／行政 2 名／コンサルタント 33 名
・男性 46 名／女性 8 名
・道内 37 名／道外 17 名

2. 講師

○車内セミナー

池田 宏 元筑波大学陸域環境研究センター

○現地解説

大串弘哉	北海道開発局帯広開発建設部 帯広河川事務所 所長
中村太士	北海道大学大学院農学研究院 教授
泉 典洋	北海道大学大学院工学研究院 教授
根岸淳二郎	北海道大学地球環境科学院 准教授

3. ツアー内容

札内川では、平成 24-25 年に樹林化対策として札内川ダムによる融雪出水規模相当の人工フラッシュが実施された。フィールドツアーでは、札内川ダムを起点に下流に向かって、人工フラッシュによって新たに出現した礫河原等の見学を行った。

人工フラッシュが樹林化問題を解決する方法の一つとして期待される一方、「ピーク流量が小さすぎ、樹林を消失させるような十分な攪乱にならないのでは？」「ダムに堆積した土砂も一緒に放流する必要があるのでは？」といった指摘が参加者からあった。こうした現状の課題を踏まえつつ、ダムの弾力的管理（中規模フラッシュ）に対する指針の策定を目指していくとの説明があった。



▲人工フラッシュによって新たに出現した礫河原への見学（札内川）

報告：高橋緑・有賀誠（明治コンサルタント（株））・渡辺恵三（（株）北海道技術コンサルタント）

5.2 北信越現地ワークショップ in 福井開催報告

応用生態工学会福井
森田弘樹（株）サンワコン

① はじめに

応用生態工学会福井では、平成 25 年 11 月 8～9 日に福井県では 2 回目の開催となる北信越現地ワークショップを開催しました。今回のテーマは「越前・若狭の里山とその保全・再生 ―コウノトリを視軸として―」とし、福井県（越前・若狭）の農地や河川を含めた里山の現状と課題、その保全と再生について考えることとしました。

② 講演・ポスターセッション

ワークショップの 1 日目は 152 名の方に参加をいただき、南条郡南越前町の南条文化会館を会場に講演とポスターセッション、総合討論が行われました。

ワークショップは実行委員長の東京大学名誉教授玉井信行氏による開会挨拶で始まりました。最初の基調講演では兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授の江崎保男氏に「コウノトリから見た里地里山の生物多様性の課題とその保全」と題して講演をいただきました。講演ではまず、コウノトリの基本的な生態について、絶滅寸前の行動が元となって神話化してしまった部分を指摘しつつ、里山に適応して暮らしていた本来の姿を紹介いただきました。そしてコウノトリが健全な陸域生態系構築のシンボルとなりうること、コウノトリは本格的な野生復帰の段階に来ており、人工給餌への依存を減らす必要があることなどが紹介されました。また、淡水魚類の再生がコウノトリをはじめとした日本の健全な陸域生態系を取り戻すカギであるとの提言がありました。

次に、越前市産業環境部里地里山保全再生推進員の日和佳政氏から、「越前市におけるコウノトリが舞う里づくりの取組み」について講演をいただきました。越前市は、かつて野生のコウノトリが生息していたことや、保護された個体の世話をした経験からコウノトリに強い思いを持つ人が多い土地柄であるそうです。そして「生きものと共生する越前市」の実現を目指し、コウノトリをシンボルとした環境調和型農業を積極的に推進しており、自然再生と農業生産の両立に挑戦していることが紹介されました。

「鳥羽谷におけるコウノトリ『えっちゃん』の行動」と題したハスプロジェクト推進協議会・日本野鳥の会福井県会員の松村俊幸氏の講演では、3 年にわたり、冬～春に三方上中郡若狭町に長期間滞在したコウノトリ「えっちゃん」の行動について報告いただきました。特に厳冬期の餌場として湛水放棄田や泥の深い営農田、湧水のある水域をよく利用しており、このような水域の水生生物の生息量の増大に繋がる生息環境の向上が、コウノトリの生息・繁殖を支える上で重要であるとの提言がありました。



【玉井信行氏】

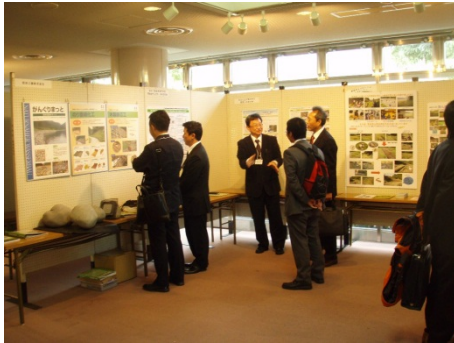


【江崎保男氏】

農村工学研究所主任研究員の竹村武士氏からは、「魚類個体群保全のための農地の水域ネットワークの再生を目指して」と題して講演をいただき、水路内での魚類の移動・分散の様子をモデル化し、水路のどの分断箇所をどのようにネットワーク化していくことが効率的な個体群の再生に結びつくのかについて分析した研究内容を紹介いただきました。また、実際の水域ネットワークの修復においては、整備・維持管理コストの面からも持続可能な環境づくりが必要であり、そのためには順応的な取組みが必要であるとの考えが示されました。

午前の部の終了後に昼食時間と並行して、ポスターセッションがホワイエで行われました。教育研究機関や市民団体、行政、企業から 13 件のポスターや製品の展示があり、活発な議論や情報交換が行われました。

午後の部ではまず初めに、基調講演の2題目として「河川の生物多様性の課題とその保全」と題して、京都大学防災研究所准教授の竹門康弘氏に講演をいただきました。講演では、河川と池沼の生態系の特徴を比較し、生態系の管理指針として河川では物質循環が物理条件に規定されやすく、生息場の管理が重要であること、池沼では環境が安定しており、特定の生物種が増えると歯止めが効かないため、生物群集の管理が重要であることが紹介されました。また、河川の生物多様性の保全戦略の立案に向け、現在取り組んでおられる研究の内容について分かりやすく説明いただきました。



【ポスターセッション】



【竹門康弘氏】

福井工業高等専門学校教授で本ワークショップの副実行委員長でもある廣部英一氏からは、「日野川の砂州と樹林化の変遷」について講演をいただきました。講演ではかつてコウノトリが付近に生息・営巣し、放鳥されたコウノトリも飛来した日野川について、白砂の河原が樹木と草本の河原に変化していった様子や、福井県が実施している河原の樹木の伐採が河川の流下能力に与える効果について、数理モデルを用いて計算した結果が示され、河川管理においては植物群落の状況に応じた管理が必要であることが紹介されました。

次に、「日野川における魚道群の整備」と題して、福井県土木部丹南土木事務所地域整備課課長の高野政志氏から講演をいただき、昭和 30～40 年代には日野川を大量に遡上していたサクラマスが再び遡上できるようにするため、平成 20～25 年に日野川の横断構造物 6 箇所について魚道の整備と施設補修等を進め、移動障害の解消を図ったことが報告されました。今年のモニタリングでは、実際にサクラマスの遡上が確認できたそうです。また、今後の課題として、「魚との対話」と言えるような現地の状況を踏まえた魚道の設計や適正な配置のほか、魚道への魚の誘導方法、豪雨による河川流量の変化や深掘れ、異常堆積、みお筋の固定化への対応や、治水と環境保全の両立、魚道がサギなどの餌場と化していることや、魚道の設置が外来種の分布拡大に繋がる懸念があることなどが挙げられ、地域を挙げて取り組むべき様々な課題があることが示されました。

福井県安全環境部自然環境課主任の西垣正男氏からは、「三方五湖における自然再生の取組み」について講演をいただき、福井県西部に位置する三方五湖で、自然と人、人と人、湖と水田などのつながりを再生するために取り組まれている自然再生事業について紹介いただきました。

最後の講演では、「九頭竜川水系の流域環境保全に関する連携」と題し、国土交通省福井河川国道事務所副所長の宇野孝一氏に九頭竜川の国の直轄区間で実施している自然再生事業について紹介いただきました。九頭竜川水系は全体で 1,055km あり、今後は支流や水路などでも自然再生に取り組む必要があり、そのためには他の行政機関との連携が、また技術の向上のためには研究機関等の協力が必要であるとの考えが示されました。さらに、ハード整備後の維持管理においては、新設された河川協力団体制度なども活用し、地域活動団体等と連携を強化することが有効ではないか、との提案がありました。

③ 総合討論

続いて行われた総合討論では、まず話題提供として越前市エコビレッジ交流センターの野村みゆき氏から、越前市西部で実施されているコウノトリが再び舞い降りる地域づくりの取組みについて紹介いただき、住民の方が熱心に草刈りをすることで地域の景観が維持されていること、保全活動の担い手となる住民の高齢化やイノシシによる農業被害の拡大等が問題となっていることなどが報告されました。続いて、玉井氏にコーディネーターを務めていただき、パネラーとして講演者の江崎氏、竹門氏、宇野氏、野村氏にご登壇いただき、コウノトリを切り口に、越前・若狭の里山の保全・再生に向けた課題とその

対策について、一般参加者も交えて討論を行いました。コウノトリについては、象徴種としての役割が期待できること、人間と同じく最終消費者であるため、コウノトリが自活・自立できる環境であれば、人間も食べていける環境であると言える、といった意見が出されました。里山の保全・再生については、特定の人が作業を担うのではなく、広く参加を募る仕組みづくりが必要であるといった意見や、内水面漁業の復活や、生活の中に里山の恵みを利用する文化を再生することが、里山の復活に繋がるといった意見がありました。

また、農業は生きもののすみ場を創出・保全することに役立っているものの米価が低迷しており、農業がその役割を十分に発揮できなくなりつつあり、農業者が元気を出して、耕作放棄地が減るような方法はないか、という質問に対しては、農林水産物の生きもののブランド化の事例が紹介されたほか、単一の種ではなく、童謡「春の小川」の風景を再現し、「春の小川米」として売り出せば、PR 力は非常に大きいとのでは、といった提案がありました。その他、生物多様性の保全が経済活動と繋がる方法としては、環境税の創設も考えうるとの意見がありました。河川の自然再生については、河原の景観を自然の力を使って再生する方法として、河道内に動く土砂を置き土としてストックすることや、人口減少社会を迎える中、河川のスペースを拡大し、遊水池や遊砂池を設ければ、氾濫原生物のすみ場を創出することができるといった意見がありました。

最後に、自然再生は流域全体が関係するもので多様な主体の連携が前提となり、そのためには自然再生の目標と、順応的管理や行動の判断基準を地域で議論して決め、それを共有することが必要であること、またハビタットへの理解と、その機能を高めることの必要性について、共通認識を持つことが必要であるとのまとめが行われました。

その後、ワークショップ副実行委員長の岐阜経済大学教授の森誠一氏より閉会挨拶があり、ワークショップの1日目は無事終了しました。



【会場の様子】



【総合討論】

④ 現地見学会

ワークショップの2日目は、39 名の方の参加を得て現地見学会を実施し、南越前町や越前市を巡り、日野川の自然再生事業やコウノトリの飼育施設、希少種保護に取り組んでいるビオトープ等を見学しました。現地では、魚道の整備を担当した行政の方や、地域の環境保全に取り組んでおられる方に案内をいただき、地域の魅力や課題について、興味深いお話をうかがうことができました。また移動の車中では、地元育ちのスタッフが地元への愛情に満ちたガイドをしてくださり、車窓の景色を一段と楽しむことができました。

⑤ おわりに

今回のワークショップを通して、コウノトリの野生復帰が持つ意味と、越前・若狭の里山の現状と課題について認識を新たにすると共に、参加者それぞれの立場で生物多様性の保全・向上に向けた今後の活動を考えるきっかけが得られたのではないかと思います。

最後に、共催していただきました（公財）福井県建設技術公社、ご協力・ご後援をいただきました北陸技術士懇談会、北陸技術士懇談会福井支部、（一社）福井県測量設計業協会、福井県農業土木技術研究会、国土交通省近畿地方整備局、農林水産省北陸農政局、環境省中部地方環境事務所、福井県、福井市、鯖江市、越前市、南越前町、（公財）リバーフロント研究所、（公財）福井観光コンベンションビューロー、（一社）福井県建設業協会、福井県コンクリート製品協会、福井地質調査業協会、日本ビオ

トープ管理士会福井県支部，福井県両生爬虫類研究会，福井新聞社，そして日頃から応用生態工学会福井の活動にご参加いただいている県内のコンサルタント・建設資材メーカー・行政等の技術者の皆様に厚くお礼申し上げます。



現地見学会（日野川魚道群）



現地見学会（コウノトリ飼育施等）

「生物多様性回復を」

コウノトリの野生復帰考察

南越前で生態、土木研究者

生態学と土木工学の研究者でつくる「応用生態工学会」の「第12回北信越現地ワークショップin福井」(福井新聞社後援)が8日、南越前町南条文化会館で開かれた。ワークショップは各地域の景観や生態への理解を目的に、毎年各地で開催している。本県で2回目の今回は「越前・若狭の里山とその保全・再生」をテーマにした。兵庫県立大教授で同県立コウノトリの郷公園研究部長を務める江崎保男氏は「コウノトリから見

た里地里山の生物多様性の課題とその保全と題し、基調講演。水田や河川の水系分断と水生動物激減の影響で餌の量が1970年代から激減していることを指摘。コウノトリの本格的な野生復帰にあたっては「生物多様性の回復が必要不可欠」と訴えた。また、日本の内水面漁業の衰退にも触れ「日本人がいま一度、淡水魚を食べるなど活用して、保全を進めるべき」と強調した。越前市のコウノトリが舞う里づくりの取り組みや河川の生物多様性の課題と保全などをテーマにした講演、三方五湖や日野川の自然再生事例の報告も行われた。

9日は、日野川の魚道施設や越前市白山地区の

提供、富士

コウノトリを通して見える里地里山の生物多様性の課題などを話す江崎氏—南越前町南条文化会館

コウノトリ飼育ケージなどを巡る現地見学会を行った。

福井新聞記事より

6 2013 年度行事結果と今後の予定

	2013 年度（平成 25 年度）開始
2. 17～4. 19	海外学会派遣研究者の公募
4. 24	応用生態工学会大阪大会第 1 回実行委員会（大阪府立大学 I-site なんば）
5 月中旬	第 1 回次期役員募集・推薦委員会
5. 21	第 55 回幹事会（麴町：応用生態工学会事務所）
5. 21	応用生態工学会会誌編集委員会（麴町：応用生態工学会事務所）
5. 21	テキスト刊行委員会（麴町：応用生態工学会事務所）
6. 1	ニュースレター60号 発行
6 月中	次期役員・募集期間
6. 5	第 65 回理事会（麴町NKビル2階WEC会議室）
6. 14	第 3 回遠賀川中島自然再生研究会 in 福岡（福岡県中間市中島）
7. 1	第 2 回次期役員募集・推薦委員会
8. 1	第 56 回幹事会
8. 9	<協賛> 平成25年度「瀬戸内海研究フォーラム in 山口」 （宇部市文化会館文化ホール）
8. 22	ニュースレター61号 発行
8. 23	第 66 回理事会
8. 26～27	第 5 回フィールドシンポジウム in 北海道 （応用生態札幌セミナーその8）
9. 2～5	<後援> The 12th International Symposium on River Sedimentation (ISRS2013)（京都市：京都テルサ）
9. 18～21	応用生態工学会大阪大会 9 月 18 日(水)：エクスカーション 9 月 19 日(木)：ポスター発表，自由集会 9 月 20 日(金)：口頭発表，特別セッション，自由集会，懇親会 9 月 21 日(土)：第 17 回総会，第 67 回理事会，第 57 回幹事会 第 58 回幹事会、第 68 回理事会合同役員会 公開シンポジウム（大阪府立大学 I-site なんば）
9. 22	<後援> 平成 25 年度 水源地生態研究報告会 （大阪府立大学 I-site なんば）
9. 25	<後援> 第 6 回淡水魚保全シンポジウム淀川大会 ～地域でまもり，みんなで育む淡水魚～ （OIT ホールおよび研修棟（常翔学園大阪工業大学））
9. 30	会誌「応用生態工学 Vol. 16-1」発行

11.8~9	第 12 回 北信越現地ワークショップ in 福井 越前・若狭の里山とその保全・再生（コウノトリを視軸として） 11 月 8 日（金）：ワークショップ（南越前町 南条文化会館） 11 月 9 日（土）：現地見学（日野川魚道群、越前市エコビレッジ交流センター、吉野瀬川ダム事業関連ビオトープ、コウノトリ飼育施設）
11.13	<共催>第 16 回 河川生態学術研究発表会（東京証券会館、茅場町）
11.15	第 2 回応用生態工学会金沢 研究発表会「川と人との関わりについて」 （石川県立音楽堂 交流ホール）
12.4	第 59 回幹事会（麹町：応用生態工学会事務所）
12.6	応用生態工学会福岡 2013—九州の応用生態工学の事例と研究— （九州大学西新プラザ）
12.13	ニュースレター62号 発行（大阪大会特集）
12	会誌「応用生態工学 Vol. 16-2」（発行予定）
2.	第 68 回理事会（予定）
2.	ニュースレター63号 発行（予定）
2~	2014 年度海外学会派遣者募集（予定）
3	流域生態系と放射性物質動態に関連する国際シンポジウム（予定）
2013 年度終了	2013 年度終了

7 事務局より

7.1 メールアドレス登録のお願い

本ニュースレターは、学会ホームページにアップロードした PDF ファイルの URL を、登録頂いたメールアドレスに送信していくこととなっております。

まだ、メールアドレスをご連絡頂いていない会員の方には、引き続きメールアドレスの登録をお願いいたします。経費削減対策の一つとなっておりますので、できるだけ電子配信にご協力下さい。

また、せっかく会費をお支払い頂いておりながら、アドレスエラーや転居先不明でニュースレターや学会誌が戻ってくるケースがあります。転居等されましたら、新しいご連絡先をお教え下さい。

メールアドレスを登録する場合は、下記の学会ホームページからお知らせ下さい。

● 会員登録情報変更連絡フォーム

<http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>

7.2 事務局への連絡方法

今年は、新規入会会員、退会する会員の出入りが多い年になりました。お問い合わせも多くいただきました。今後、ホームページの案内をいっそう工夫することも考えますが、事務局へのお問い合わせや連絡は、まずはメールをお願いします。記録が残り、間違いがすくなくなりますので、電話より有効です。

学会事務局のアドレスは、e-mail eces-manager@ecesj.com です。よろしくお願いいたします。

.....
[2013 年 12 月 9 日現在会員数]

名誉会員 : 4 名

正 会 員 : 1 0 1 7 名

学生会員 : 1 0 6 名

合 計 : 1 1 2 7 名 (2014 年 3 月 31 日付けで退会予定 : 正会員 26 名を含む)

LEE 購 読 者 数

正 会 員 : 9 8 名

学生会員 : 3 名

合 計 1 0 1 名

賛助会員 : 2 9 法人 (4 3 口)